

対連合学習しかしていない私にとって、不勉強を恥じるとともに新鮮な驚きでもあった。いつまでも新しい研究を進めていこうとする姿勢を、彼女は示してくれた。

また、会場では手紙をやりとりをしたことのある何人かの人達や、大学で教材に使ったりしている本の著者と会うことができた。皆良い仕事をしている人達だが、思いのほか若く、30代半ばで働きざかりである。さらに、スウェーデン、アメリカ、インドネシアなど、各国の若い研究者と友人になれたことも貴重な体験であった。

さて、学会そのものについては、他の方がより詳しく御報告なさると思われるので、その周辺のなことを幾つか記してみよう。

会場やホテルでは、沢山の日本人の方々とお会いした。夜には、連日のようにどなたかの部屋を会場にミニパーティが開かれた。出席者は、学会の重鎮の方々からヤングサイコロジストまで幅広く、ベッドや床に座り込んでのくつろいだ雰囲気だった。それぞれの発表への反響やシンポの話などの学会の話題から、現地の物売りとの交渉の仕方まで、和気あいあいと話に花が咲き、時の経つのも忘れる程であった。

ミニパーティでのヤングの話題はパラセーリング（パラシュートをつけてモーターボートで引いて空に飛び上がるスポーツ）だった。アカブルコ名物とは聞いていたが、これに挑戦する人はいないのではないかという私の予想に反して、2回も飛んだという女性もあらわれ驚いた。発表が終ってほっとした後、私も早速挑戦してみた。

1回2,000ペソとふっかける案内人相手に、メキシコシティで仕込んだ値切り術を駆使して1,000ペソにまげさせるのに成功。しかし、あいにく財布には日本の

1,000円紙幣が1枚あるだけ。幸い、物好きな(?)みやげ物売りの男にこの1,000円札を1,200ペソで売りつけ、念願の空中散歩を楽しむことができた。高度40メートルからの紺碧のアカブルコ湾の眺めは、爽快で忘れられない経験となった。つけ加えると、残りの200ペソは、飛行後の海辺でのセルベツァ（ビール）に。

ところで、後で考えると公定レートは、1,000円＝700ペソ。アメリカ、メキシコと旅行してきたため、通貨レートで混乱してしまい、実際よりも500ペソも高く売りつけてしまった。メキシコへの途中に寄宿したBandura博士夫妻から、メキシコでは物売りにだまされないようにと注意をもらっていたが、これでは逆にだましてしまったことになり申し訳ないことをした。

最後に、メキシコで一番心に残ったのは、物乞いをしたり、みやげ物を路上で売ったりしていた子ども達のことである。彼らはすべてインディオであり、道を歩くと手に手にお面やつばなどの民芸品を持って寄り集ってくる。この中には、4、5歳ぐらいの子どもも多い。彼らは路上で食事をし、路上で寝る毎日で、当然学校にも行かない。10歳ぐらいのリーダーが幼児をひきつれて物売りする姿は、陽気でたくましく、生活力さえ感じさせる。しかし、学校制度から排除された彼らにとって、貧困からの脱出は容易なものではない。偉大な南米インディオ文化と、スペイン人の侵略といった歴史の流れが今、この子ども達の生活に影を落としているのだと思うと、何か言い知れぬ思いがした。また同時に、幼児の頃から塾やおけいこ事に追われる日本の子ども達を思い起こし、複雑な思いにとらわれたことだった。

(千葉大学)

● 国際心理学会議 ●

核兵器と心理学者

伊藤武彦

「ヤング・サイコロジスト」の制度のおかげで、1984年9月メキシコ・アカブルコで開催された第23回国際心理学会に参加しました。その中で特に印象に残ったことの一つとして、平和問題に真剣に取り組んでいた世界各国の心理学者の姿がありました。

平和問題については、最終日の六日目にシンポジウムが二つ開かれました。一つはアメリカのHarari氏が組織した『平和心理学——生存のための応用心理学——』で、「世界市民のための教育」「反核行動の起

源——認知的・感情的決定因——」「平和に貢献する進化論」等の報告があり、もう一つはフィンランドのLagerspetz氏が呼びかけた『世界平和の理解と促進への心理学の寄与』というテーマのシンポジウムで、これには欧米からの「世界と平和における怒りの役割」「戦争は攻撃性に起因するか？」等の報告の他、日本からも入谷氏（東海大）が報告をおこないました。

この二つのシンポジウムの他に平和セッションが連夜に渡って開かれ、アメリカ、ソビエト、カナダ、東西ド

イツ、メキシコ、コロンビア、トルコ、イスラエル、ブルガリア、スウェーデン、フィンランド、チェコ、スイス、オランダ、ポーランド、デンマーク、スペイン、インド、オーストラリア、ニカラグア、ハンガリー、イタリア等三十ヶ国以上の研究者が参加し、市民として心理学者として平和のために何をなすべきかが熱く討論されました。国境や体制の違いを越え、思想・信条、学説の違いを越えて、平和のため核戦争阻止のため全世界の心理学者が協力する必要が合意され、最終日の国際心理学連合（IUPS）総会に『平和のための心理学者』と題する特別決議案を提出しました。

今日の人類が核戦争の危機におびやかされている事を指摘し、IUPSの中に「平和を求め核戦争に反対する心理学者」という名の委員会を設置することを提案したこの決議案は総会で採択され、東独のKossakowski氏を委員長とする五人より成る設立委員会がIUPSにより任命されました。

このような動きのなかで中心的な役割を果たしたのはCarmi Harari氏でした。彼の自国での活動は、“Psychologists for Social Responsibility”（以下PsySRと略）というアメリカ心理学者の全国的な平和団体に基盤があるようです。PsySRの会報（Newsletter）によれば発足は1982年で、二十四人の全国運営委員会にはJerome BrunerやCarl R. Rogers等の著名人も名を連ねています。会報は年四回発行され、年間予算は四

万ドルの規模で、アメリカ心理学会（APA）では、平和問題の企画をAPAと共催または単独で行っています。各地域でも核問題を中心に様々なグループが活動しています。カナダにも同様の団体、“Canadian Psychologists for Social Responsibility”が1983年より活動を開始しています。

このような海外の心理学者の活躍を見聞きするにつけ、私自身が核兵器問題や日本国内での平和運動に無知であることにやや恥入ってしまいました。折も折、帰国後もなく『ザ・デイ・アフター』や『核戦争後の地球』の番組やビデオをみる機会があり、改めて熱核戦争が人類だけでなく地球全体にいかほど凄惨で潰滅的な影響を与えるかを思い知らされました。核兵器の脅威をなくすことは人類にとってまさに死活的な緊急課題であるという気がします。

今年は、終戦後四十年、広島・長崎に原爆が落とされて四十年になります。広島・長崎・ビキニと三たび核兵器の被害にあい、いまだに苦しみの続いている被爆者・被爆二世のいる日本、非核三原則をもち平和憲法で再び軍備を持たず戦争放棄を誓ったこの日本で、私たち心理学者どうしが、核兵器の問題について討論しあったり核戦争を防止する課題を協力してすすめられるような場はないものだろうか——このようなことを最近よく考えています。

（和光大学人文学部）



日本生理心理学会の発足にさいして

宮田 洋
（学会代表）

日本生理心理学会（Japanese Society for Physiological Psychology and Psychophysiology, JSPP）が誕生するに至った過程を述べて、当学会の紹介とした。

1968年6月8日に東京教育大学の故岩原信九郎教授らが発起人となり、第1回生理心理学懇話会が同大学本館4階会議室で開かれ、31名の者が出席した。現在の製品科学研究所人間工学部の永村寧一氏が、「脳波の多変量解析」について話題を提供した。発会の動機は、学会では疑問点について緻密な討論を時間をかけて自由に行なうことができないので、効果的な意見交流が可能な気楽

な会合を持ちたいというところにあった。その後、懇話会は年2回のスケジュールで主に東京を中心に開かれた。1970年12月5日に早稲田大学（新美良純、現在、東邦大学）で開かれた第7回懇話会から、新美氏のかつての提案により会の名称が生理心理学・精神生理学懇話会となった。翌年、懇話会は初めて東京を離れ、大阪府立公衆衛生研究所（三宅 進、現在、ノートルダム清心女子大学）で開かれた。「情動の生理心理学・精神生理学研究の動向」をテーマとして、心理学、生理学、精神医学領域から話題提供があり、約100名の出席者とともに活発な学際的討論が展開された。